

TOGETHER FOR A FAIRER WORLD

FAIR TRADE



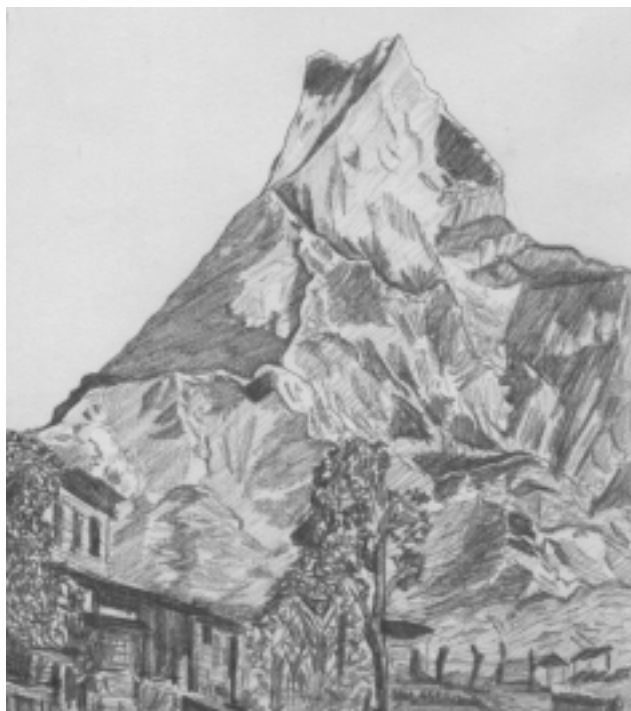
第 22 号
2000 "N02"・

ネパリ・バザーロ だより



ベルダレルネーヨ通信

ネパリ・バザーロは、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ(NGO)であるベルダレルネーヨ(ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会)のトレード部門として1992年から活動しています。1998年2月からは、地球市民かながわプラザに直営店「ベルダ」をオープンして第三世界からの品々をご紹介します。



特集

フェアトレードの現場とその思いシリーズ その2

- ① **ネパールの染色事情** - 草木染めを通してみたネパール - 西岡啓子 / 編集部 p.2

生産者を訪ねてシリーズ その9

- ② **スタンプ職人** 元気なデ・イマソン 廣田麻紀子 p.6

技術研修生受け入れへの思い	横浜市国際交流協会	浦川久代.....	p.8
サラダさん研修を終えて	コープかながわ	水落葉子.....	p.9
日本研修を終えて	サラダ・ラジカルニカル / 子どもたちからのお便り...		p.8,9
新刊案内「行ってみようあのお店」	フェアトレードの本全国版 / 海外の動き...		p.10
新製品紹介「ネパール・カレー」	料理講習会レポート	高橋純子...	p.11
お知らせ・編集後記			p.12

ネパールの染色事情

— '•••••,β,δ,ε,μ,Α,Υ,η,θ,•[f< —

西岡啓子 / 編集部

私達が日頃扱うハンディクラフトにとって染めは重要な要素。現地では、これをどのように扱っているのでしょうか。染色の範囲は広いですが、今回は天然のものに限定して、そこから生産者、そしてネパールの社会をみてみることにしました。現地で、生産者を訪ねて問題解決にご協力頂いた西岡さんのお話しを中心に、研究所と現場(実業界)で努力している人々の様子をお伝えします。

青年海外協力隊の活動を通じて 西岡啓子

私は青年海外協力隊<以下JOCVと略>、職種・染色として、大学の研究所で植物染料の染色方法の指導、研究アシスタントの役目をするを目的に、1997年7月から2年間、ネパールの首都カトマンズに派遣されていました。



来日中のサラダさんとお話する西岡さん(右)

ネパール染色の歴史

ネパールにおける天然染色には、長い歴史がある。布や毛糸を染めて織物を作る時、また、タンカなどの仏教画やマンダラ、僧院の彩色などの際に天然染料は用いられ、それは今でも鮮やかな色を残している。その天然染料には、少なからぬ数の植物が染料として伝統的に使われてきた。

14世紀頃より、染色をするカーストは、カトマンズにいたネワール人達の中で「チパ(Chippah)」と呼ばれ、認識されてきた。

18世紀には、ネパールに自生する植物がネパールの豊かな染色に生かされていることが発見された。中でも、染料としてよく知られている茜は、古い資料にも記録され、リンブー族が茜と塩を物々交換し



派遣先

派遣先はキルティプール(カトマンズ市内からバスで40分程)にあるトリブバン大学内の応応科学研究所(Research Center for Applied Science and Technology <通称 RECAST>)。

この研究所の目的は、主に自然素材、自然エネルギーを利用することにあります。染色研究室の他には食品加工、建築素材、ソーラーシステム、植物研究室、植物油研究室、等があります。スタッフは総勢100人程で、研究員、助手、作業員、事務員等です。時に学生も出入りして自分の研究をしています。設立して22-23年になります。染色研究室は設立当時、繊維研究室だったらしく、主に植物繊維(麻)の研究を行っていました。現在は植物染料について研究しています。チーフはラクシュミー・マッラさん。ここで植物染料を研究して10年ぐらいになる人です。(大学では化学を専攻していて、その後、研究所に入るまでは大学のキャンパスで化学の講師をされていた。)

約6年ほど前に、当時この研究員だった、ピナ・シュレスタさんと一緒にネパールの染色に使用出来る植物について調査し、本を出版しています。(染色の関連資料の項参照)

本の出版当時はカトマンズの郊外や地方の数箇所まで染色トレーニングも行っていたという事です。5、6年前からは植物の色素を取り出す研究を行うようになり現在も続けられています。

ていたこともわかった。

最近では、クンブ地方のシェルバ族が多種の植物染料(特に茜を用いたもの)を少なくとも1940年代まで用いていたことがわかったが、1953年からは山間部にも化学染料が急速に広まった。化学染料は、価格が安く使用方法も容易であり、村の人々にとってはいろいろな色を染めるための多様な植物を集める時間の短縮にもなった。

しかしながら、経済状況は変化し、現代の人々の嗜好はより自然的で環境にやさしいものを好むようになった。今の時代は、その土地に根ざした原料を利用して伝統的技術を再生したものを要求してきている。それに応えるかたちで現在のネパールでも天然染料を使った染色が見直されている。

色素研究と発色実験

研究所では植物から色素を抽出し、保存可能で染料として使用できるものを作る研究が行われていました。主に茜の根を対象に実験されていました。私が派遣される前には色素をそのまま損ねないで



茜の根

得るために、いろいろな実験データを残して研究をされていたようです。本来、ネパールの茜の根からは、ビビットカラーの強い赤を染める事ができます。私の役は今まで研究所で作ったパウダー染料を使用して、染色条件を探るテスト(基礎染色方法の指導)を行うことでした。パウダー染料から染めたウールはきれいなオレンジ色。しかし、本来の赤みを製造過程に失ってしまう事が研究員の悩みどころでした。パウダー染料にこの赤色を得ることが、最終的には出来たのですが、あくまでこれはテスト段階のレベルであって、実用的なものを製造するには、まだまだ難しいところです。

ネパールの植物染料は今までは主にカーペット用のウールに染められていました。最近は麻や綿、紙に染める需要も増えています。研究室ではずっとウールの糸染めが中心で他の素材に染める事は殆どなかったので、他の素材の染色、新しい技法の指導も行いました。植物染料の染まりにくい綿布を中心に絞り染め、ろうけつ染、ブロックプリント等を行ってみました。堅い研究内容ばかりでなく、実用的なものを、そして、染色の面白さ、植物染料の持つ魅力、可能性を伝えたかったからです。

研究所と実業界の交流について

「研究所で行った研究結果は、その後どうなるの?」こういう質問をよくされるし、私自身の最初に考えさせられた事でした。例えば本の出版などを行えば、一般の人に公開する機会になります。また、トレーニングを行えば、新しい技術を伝える事になります。しかし、実際は費用不足の問題でこれらを実行する事はなかなか出来ません。やる気のある研究員は進んで学会に参加して発表したりして、他にアピールしていきますが、これはもう、研究員の個人差の問題です。研究所と実業界との交流はどちらかの強いアピールがないと難しいのです。もし、実業界側が自社の開発と利益のためにだけに研究所を利用するとなると問題になるので、安易に個人的な交流をつくる事も出来ません。政府関連機関とプライベート企業の壁を越すのはなかなか難しいものがあります。

最近は植物染料を使ったものの輸出品の需要も増えているので、実業界の染色技術レベルの方が意外と高いかもしれません。ただ、化学薬品使用の危険性から考えて、やはり研究所と実業界の協力があってほしいものです。



染色研究室にてラクシュミさん(右)

染色の関連資料

1) ネパールの植物染料

The Natural Dyes of NEPAL by Laxmi Malla 1993
RECAST, Tribuvan University

(主な染料を使用してウールの染色方法を紹介したもの)
182種類の天然素材とその色の目安をまとめ、且つ、32種類の天然素材と各種媒染剤との組み合わせによる色抽出のデータとその色見本161種類をまとめている。

2) ネパールで採取される植物染料

(ネパールの染料に使用できる植物を紹介したもの)
DYE-YIELDING PLANTS OF NEPAL by Bina Shrestha 1994
RECAST, Tribuvan University

3) ネパールの薬草

(ネパールで採取される薬草をまとめたもの。植物染料を知るのに便利)
Medicinal Plants of NEPAL
(Bulletin of Department of Medicinal Plants No.3)
His Majesty's Government Ministry of Forests and
soil conservation Department of Plant Resources

1) Dye-Yielding Plants



2) Natural Dyes

3) Medicinal Plants 5版

3) Medicinal Plants 初版

実業界でお会いした人々とその印象

赴任当時でネパールの状況が飲み込めてなかった私には、とても辛い仕事の日々でしたが、そこで励まされたのが実業界で出会ったサラダさんやラダさん達でした。

染織を始め、工芸品の製作販売に携わる人々は相手の輸出国のニーズに合わせるために、ネパールのバザールでは見られない新しいデザイン、品質の良いものの開発を目指して努力していました。働きながら相手国の語学を習得しようと仕事時間外に語学学校に通ったり、個人的に染色実験を行いながら、工場の経営をしていたり・・・。ネパール人は仕事をしない、とよくいいますが、(実際そういう人もいますが)熱心に働いている人もいます!!と見直しました。なかなか、チャンスの得にくいネパールで向上心を持ってがんばる事は、相当な気力がある事だと思います。そういう人たちに会おうたびに、とても励まされました。時間の許さざり他で染色の仕事をしている人たちの問題点を持ち帰って、研究室でリサーチする努力をしました。この出張リサーチが後半の自分の素になって行きました。さらに後にラクシュミーさんの染色に対する興味を引くきっかけにもなっていたのです。この2年間、こうして、無事(?)仕事を終える事ができたのは、いろんな人に会い、支えられてきたからだと思います。

ラクシュミ・マツラ(Laxmi Malla)さん

に伺いました (編集部)

植物染料との出会いは?

大学で化学を専攻し、卒業後、トリブバン大学で4年間、学生に化学を教えていました。その後、トリブバン大学調査研究所(Tribhuvan Research

Center)へ移り、主に調査研究を行いました。1981年より植物染料の調査研究にかかわるようになり、様々な文化の背景の調査や、羊毛、綿、シルク、ヘンプ、アローなどの素材に対して100種を越す染め方の研究などを行いました。

特に注目して行った研究は?

植物染料は、季節や素材により色が変化したり手に入らなかったりして供給が不安定です。そこで、色素を抽出して粉末をつくり、いつでも使用できたら便利であるし、色の変化も少なくてすむので、この色素抽出に注目して研究して来しました。

外部との交流

絞り染めでは、FTGN(Fair Trade Group in Nepal)^{注1)}に所属しているマヌシが日本へサンプルを出す時に大学の方で実験とサンプルの製作を行いました。その他、WEAN^{注2)}などとも情報交換をしています。

これからもっとしたいことは?

現状の研究の完成度を高めることと、新しい色素抽出に注力したいと思います。

ラダ・クリシュナ・ダウバデルさん

(Radha Krishna Dhaubhadel)

に伺いました (編集部)

植物染料との出会いは?

17年前に大学を卒業して、4年間、Department of Resources で働きました。そこで、植物染料の調査を始めました。その後、BCP^{注3)}で4年間働きました。BCPでは、直接、現在の仕事とは関係していませんでしたが、その後、草木染めの要求の高まりと合わせて相談を受けることが多くなり、この仕事を始め

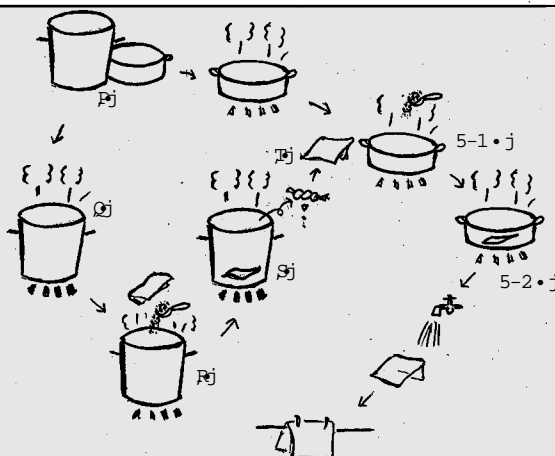
染色の媒染剤と染め工程 (ラダさんの工房から)

材料と媒染剤との比率
材料に対して1%-2%の媒染剤を使用。アルミニウムは良く使用する。銅は、極力最小限に押さえている。

媒染剤としては、アルミニウム、鉄、銅、クロムを使用している。但し、クロムは環境にきついのて、極力使用していない。消費者が鮮明な色を要求する場合だけ使用。

製作工程 (例: アローの布地をグリーンに染める場合)

- 1) 染める生地を入れる容器を2種類準備する。
- 2) 1番目の釜に水を入れ、沸騰させる。
- 3) そこへ、媒染剤の鉄と、染める布地を入れる。
- 4) その後、1時間半煮る。
- 5) そこで煮た布地を取り出し、別に用意した沸騰したお湯の入った釜に、その布地と染料(黄色の植物染料と藍)を加え、再び1時間半煮る。



るきっかけとなりました。以来、現在の仕事(Eco Craft Nepal)へと繋がりました。

何故、植物染料なのですか？

環境にやさしく、また、ネパールの森には、染料の素が沢山あります。更に、村人の仕事にもなります。また、食用でないフルーツであれば、ただ森の中で消費するより有効に使った方が良いと思います。

染料の素になるのは、どのくらいですか？

現在、13種類(No.1 から 13)の染料の素を使っています。


$$\mathbb{G}R \cdot E/N/\% / t f q, \hat{I} \cdot - \pm \cdot \check{S}, \acute{E}, \ddot{A} / \% f _ , ^3, \tilde{n}$$

植物表目一覧					建築図による植物の表示			
No.	SC NAME	Eng. Name	Local Name	Part	日本語	アルビ	緑	赤
1	<i>Terminalia indica</i>	Bastard Myrobalan	Burni	fruit & bark	シロ(バシ)のー	黄	赤	深緑
2	<i>Acacia catechu</i>	Catechu tree	Khajur	wood extract	ベグ岡仙薬	赤	赤	コブ赤
3	<i>Juglans regia</i>	Walnut	Chhat	bark of fruit	丸胡桃	赤	赤	赤
4	<i>Rhus emodi</i>	Shikah	Pedunculat	suberous root	大胡麻	黄	黄	赤
5	<i>Ebrebia unguis</i>	Berberis	Chatro	bark of root & stem	ざん科	黄	赤	黒
6	<i>Myrica verticillata</i>	Bes beryel	Kafai	bark of plant	赤木、もち皮	黄	赤	黒
7	<i>Ficus cordifolia</i>	Indian Mulber	Muglio	bark & stem	黄栗	赤	赤	黒
8	<i>Phyllanthus emblica</i>	Emblic Myrobalan	Amala	fruit & bark				
9	<i>Aegle marmelos</i>	Bael fruit	Bai	fruit				
10	<i>Femula nepalensis</i>	Lichen	Jhyas		ゴウのー種			
11	<i>Punica granatum</i>	Pomegranate	Acar	fruit	ざくろ	黄	赤	黒
12	<i>Terminalia chebula</i>	Myrobalan	Burni	fruit & bark	シロ(バシ)	黄	赤	黒
13		(retineral)	Las(Lah)		シロムハ、洋灰	ピンク	グレー	グレー
	<i>Symplocos physalifolia</i> C.B.					オレンジ		
14	Cake		Bird charcoal	wood	紅木	赤	赤	赤
15	<i>Allium rose l.</i>	Onion	Pya	skin	玉ねぎ	黄	赤	グレー
16	<i>Coccoloba reticulata</i> L.		malabar	root	紫	紫		
17	<i>Leersia alba</i> Torr.	Henna	Mohani	leave	ヘナ	オレンジ		
18	<i>Cathartus tinctorius</i> Ann.	Safflower	Karam	flower	紅花			

1) FTGN(Fair Trade Group in Nepal)

ネパールのハンディクラフトを扱う9フェアトレード団体（詳細通信15号参照）

注3) BCP(Bhaktapur Craft Printers)手漉きの紙を生産するフェアトレード団体

染色の技術向上トレーニング

ネパールのフェアトレードグループ FTGN 注1)

昨年10月3日より8日間に渡り、カトマンズのマヌシ(FTGNのメンバー)工房にて、技術と品質の向上を目指した染めの技術講習会が、FTGNのメンバーを対象に実施されました。そこでは、色むらをなくするにはどうするかを中心に、染め方の工夫、コストパフォーマンスを考えた染め方など、実践的なプログラムが実施されました。和気あいあい、仲良く話合う雰囲気が漂っていました。



FTGN 9 団体の担当が出席し、技術を磨く

廃液の処理

ハンディクラフトに染めはなくてはならないものの一つです。でも、その染料の使用後の処理は気になります。小さな生産者の場合、極力、廃液が残らないように努め、捨てる場合には、穴を掘って処理しているというのが実情のようです。ネパールのフェアトレード・グループの一つ、ACPでは、海外からの支援、特に、デンマークの技術サポートを受けて、廃液処理施設を作りました。100%の完全な処理とは行きませんが、80%までクリーンになるそうです。小さな生産者も、共同でこのようなことができないものかと考えさせられました。

(廃液処理については、その改善を目的に更に調査をすすめる予定です。)



中央左に見えるタンクが廃液処理施設の一つ。
ここで、固形化して、次の施設で焼却する。

染めの廃液処理の仕方

スタンプ職人 廣田麻紀子

--- 元気なシディマンさん ---



タイムスリップをしたような古い町並みが残されるカトマンズの中心、ニューロードの外れダルパール広場の裏手。その町並みの中にシディマンさんのお家はあります。細く高く建てられたレンガの家。今回私たちが訪れた時は着く時間もはっきりしない中、ずっと家の前で私たちを待っていてくれました。人通りの向こうにシディマンさんが見えました。あのはにかんだような笑顔で一言「ナマステ」、懐かしい笑顔です。

蛍光灯がついて明るくなった！

シディマンさんの家は1階部分がトイレ、2階に仕事部屋、3階に子どもと夫婦の部屋があります。頭も肩もぶつかってしまうようなはしごのような階段を上って、シディマンさんの仕事場へおじゃまします。ネバリ・バザー口を始めてからの長いお付き合い。始めの頃は仕事部屋にも電気が無く、日が暮れたり、天気の良い日はあまり長い時間スタンプを彫ることはできませんでした。前回訪ねたときも電気はくらい蛍光灯が一つ。それがどうです、今回の訪問では明るい蛍光灯が手元に一つ、背中側に一つ。そのおかげで私たちは夜遅くまでシディマンさんのご家族とお話をすることができました。

スタンプを彫ることが好き、でも仕事がない

25年前にネパール政府の機関（ネパール・ハンディクラフト・アソシエーション）が提供した仕事



象とガネーシャを彫り上げたところ

自作の器具で真剣に彫るシディマンさん

作りのプロジェクトで、シディマンさんは1年間木彫りの技術トレーニングを受けました。紙漉きや染めなど他の技術指導も選べたこのコースで、あえて非常に習得が難しく、体力的にもきつい木彫りの技術を選んだシディマンさん。その理由を聞いてもにっこり笑って「理由はないよ。やっぱり彫ることに一番興味をもったから」と答えるだけ。

技術を習得してからもゴム印に押されて、なかなか仕事がまわって来なくて、工事現場の仕事で日銭を稼ぐ日が続きました。そんな時、シディマンさんの友人がシディマンさんと私たちネバリ・バザー口をひき合わせてくれたのです。長いこと木彫りの職人さんを探していた私達とは運命（？）の出会い。正確な技術、熱心な仕事ぶり、やさしい人柄。長いお付き合いになりましたが手を抜いたり、納期が遅れたりしたことは一度もありません。いつでも信頼おける仕事をしてくれます。

今では木彫りの仕事だけで、家族を養えるようになり、2人の子どもは学校に通って教育を受けています。シディマンさん自身の回りにも変化がありました。日本や他からのオーダーを受けるのに、前は歩いて出てきていましたが、なんと最近は自転車に乗って颯爽と現れるようになり、先日は念願の電話も家にひくことができました。

将来の夢

夢は？と聞いたら「子どもたちが良い子でずっと育って欲しい。小学校が終わってももっともとと学ばせてあげたい」とはにかんで一言。「あとは、うーん、いつか自分の家が欲しいな」と大きい夢も膨らむシディマンさんでした。

道具はどうして作るの？なんと傘の骨！

彼の使う道具も見せてもらいましょう。細かい図柄、細い線や太く力強い線、などなど様々な図案にあわせて、数十本の色々なノミや刀があります。由緒ある道具なのかな～...と思ってよく見ると、どこかで見たことがあります。私たちの生活でも良くお世話になっているもの。始めはなんだかわかりませんでしたけど...なんとそれは傘の骨を自分で加工して作り上げた道具でした。傘の骨で作った刀と家具の木工所でもらった木切れをとんかち代わりにして、器用に器用に彫っていくのです。目の前で広げられる職人技はまるで魔術のようです。

スタンプを彫る材料の木は近くの家具の木工所から木切れを買ってきます。シディマンさんの言語であるネワール語でハルと呼ばれるその木は硬く、彫るのは体力仕事です。やさしい顔からはちょっと想像つかないくらいのごつい手をしているのは、長年の職人生活で作られたのでしょう。

特殊な紙に図案を写し、木の上に貼り、水を含んだ布で押ええると紙の部分がとけて、木には図案のインクだけが残ります。大まかなアウトラインから細部へと彫り進みます。見ていてだけで息がつまり、肩が凝りそうな作業。実際今一番困っていることは？の質問には「肩が凝るのが困るな」の答え。

製作したスタンプはどこへ行くの？

シディマンさんが受けるオーダーは半分がネパール国内のローカルマーケット向け。残り半分が外国向け。ただし安定して継続的にオーダーが入るのはネバリ・バザー口のオーダーだけだといいます。簡単な図柄で一日10個～15個、難しいものになると一日5個が限度です。一度にたくさんのオーダーが来ても製作数を急に増やすことのできない地道な仕事。ネバリの継続的なオーダーは彼にとって非常に重要な仕事なのです。

後継者作りは、それでも難しい

オーダーが順調に入ようになった頃、シディマンさんは若い職人さんを育てようと、一人の青年に仕事を教えようとしました。しかし習得が難しくきつい作業に音を上げ、すぐに辞めてしまったそうです。長い歴史の中で伝えられてきた木彫りの技術を、芸術の世界ではなく生活の中の技術としてどうつなげていくのか。どこの国にもある問題がここにもありました。

私達のお付き合いの姿勢

ネバリ・バザー口が扱う様々な手作りの品のすべてに生産者たちの生活の物語が込められています。彼らの栽培、製作したものを継続的に輸入し、販売することで、彼らの自立した生活を応援するフェアトレード。私たちネバリ・バザー口は生産者の人々の生活がフェアトレードによってどう変わっていったのか、どういう影響を及ぼしているのか、いつもこの目で確かめ、話し合いながら一番良い道を模索し進んでいきたいと思っています。お付き合いしている団体のサイズにこだわりのも、生産者一人一人の生活を見つめていきたいから。

個人の職人であるシディマンさんはなんのフィルターもかからない、本当の意味での顔の見えるお付き合いをしている人の一人なのです。

ブレーカーが飛び、真っ暗闇！

奥さんとの馴れ初めや、子どものこと、仕事のことと話はつきません。奥さんのお手製のロキシ(ネパールの強いお酒)で良い気分にもなってきました。話ながらもシディマンさんはお茶を入れ替えてくれたり、お酒を足してくれたり色々と気を使ってくれました。10月とはいえ、今夜は風も無くちょっと蒸したような暑さ。買ったばかりの小さな扇風機を私たちが暑いだろうと、つけてくれたとき...そう、皆様のご期待通り？、その分まで電源は供給できず、ブレーカーが飛び、真っ暗闇。私たちもそれを潮においとましました。

ダサイン(ネパール最大のお祭り)が近くなってきて街にはまだまだ、人通りがあり活気にあふれています。ほろ酔い気分の私たちは、あっちの人にぶつかり、こっちの人にぶつかりながら宿へ帰ったのでした。



ご家族との時間を楽しむシディマンさん

1999年度もネパールから「技術研修生」を受入れることができました。そこで、関係者にその受入への思いを伺いました。

技術研修生受け入れへの思い 横浜市国際交流協会 浦川久代

当協会の「海外技術研修生受入事業」は、1977年、「途上国の人材育成」を目的に、市内企業の協力を得て始まりました。これまでに、主にアジア諸国、16カ国から235名を受け入れています。

産業の発展を支援するという性質が強い事業ですから、対日貿易業務が拡大できた、メンテナンス技術を身に付けられたなど、過去の研修生から成果を耳にすると、やはり非常に嬉しいものです。

しかしこの事業の目的は、「経済」や「技術」だけではありません。研修を通じて人同士が交流し、お互いの理解を深めることも大きな目的です。例えば、受入企業の人から、民族衣装での出勤や社員食堂でも厳しい食事制限を守る姿勢にとまどったものの、やがて文化的な背景を理解するにいたった話などを聞きました。研修生も、実際の日本人と接して考え方が変わったと言います。中には、10年以上も文通を続けているという人もいます。「研修」を通じて起こる、こうしたことの積み重ねが、互いの異文化理解と交流に結びついていってほしいものです。

最近では、受入側にも海外経験が豊富で外国語が堪能な方が増えました。通信手段の発達により、

研修生の方も来日前から日本のことをよく知っています。ことさら「異文化」に戸惑う姿は少なくなってきたように思います。むしろ、これからの課題は、20年以上も続いたこの事業で得た人材と、どう連携を保っていくかということでしょう。

横浜市国際交流協会と研修生、研修生と受入企業、研修生同士。「ヨコハマ」をキーワードにネットワークができるよう、活動を続けていきたいと思っています。



研修終了式にて、終了書をもらうサラダさん（左）

日本研修を終えて コットン・クラフト サラダ・ラジカルニカル

横浜市国際交流協会のお世話で、AOTS（（財）海外技術者研修協会）の研修生として、3ヶ月半、日本に滞在し、受け入れ先のコープかながわ、ネパリ・バザー口で大変お世話になりました。その間、仕事だけでなく、ホームビジットや、交流会を通じて様々な出会いがあり、心の交流が持てたこと、大変嬉しく感じております。

この研修を通じて、多くの組織、お店、そして個人の方々と接触し、本当に沢山の情報交換ができ、頭で考えるだけでなく、体験を通して考えることができました。特に、コープかながわでは、ネパールでは未発達な消費者協同組合の活動について考えさせられましたし、これからのネパール都市部での女性の家事負担軽減に向けての商品開発、配達の仕方など、参考になることが多くあったと感じています。これは、WEAN コーオペラティブ^{P11注4}に伝えて生かして行きたいと思っています。ネパリ・バザー口の研修では、特に、都市部だけでなく、地方の工場、お店や市民、学生の方々との交流を通して、フェアトレードへの思いと心遣いを直接感じ取れたこと、そ

して苦勞されながら努力されている姿を感じ取れたことは、今後、生産者の立場で活動するときにも、相手の状況を思いやりながら仕事ができることになり、嬉しく思います。

本当に、皆様、ありがとうございました。この経験を自分の国で生かして行きたいと思っています。



ネパリ・バザー口で市場ニーズを話合うサラダさん

1999年度もネパールから「技術研修生」を受入れることができました。そこで、関係者にその受入への思いを伺いました。

サラダさん研修を終えて

コープかながわ 水落葉子

“コットン・クラフト”経営者であるサラダさんのお仕事とコープでの研修は直接の関係はありません。家族を残してはるばる遠く離れた日本で研修するにあたっては並々ならぬ決意があったはずですが、その意気に応じて有意義な研修を提供できるだろうか？、肉・魚の工場見学、共同購入やお店での研修が本当に彼女の役に立つのだろうか？、不安はつのるばかり。土屋春代^{注1)}さんの「広く日本の流通の仕組みを知ることにはサラダさんのためになる。どんなことでも無駄ではない」という言葉に励まされての受入れでした。でも、そんな心配は、研修をはじめるとすぐに吹き飛ぶことになります。

研修4日目、共同購入(グループごとに商品を届ける)のトラックに同乗し、組合員の家々をまわっていたときのことで。それまで快活だったサラダさんが目を伏せて何かを考えている様子。しばらくしておっしゃいました。「ネパールの料理に欠かせないスパイスは、各家庭で砕いたり、粉にしたりして調合するけど、働く女性は忙しくて時間が無いの。それに、粗悪品も出まわっています。コープのシステムを参考に、良質なスパイスをすぐ使える状態にしてトラックで各家庭やグループに配達したらどうかしら。

女性が働く場も広げられるわ」ネパールの地形や交通、流通事情を考えて共同購入はムリ、とばかり思い込んでいた私。サラダさんの言葉に驚き、自分の視野の狭さを恥じました。そして何より、サラダさんの発想の豊かさと前向きな姿勢に感嘆しました。

何事にもポジティブで、ちょっとまねできないほどアクティブ、それでいていつも輝くように美しいサラダさん。ネパールの女性がいきいきと働ける場を着実に増やしていけるに違いないと期待しています。

注1) 土屋春代：ネバリ・バザール代表



店研修の中で、かぼちゃを切っているサラダさん

子どもたちからのお便り

ミラちゃんからお手紙

学費を支援して、プライベートスクールに通っている8年生です。

「ダサインとティハールで1ヶ月のお休みでした。1学期のテストが終わりました。まだ結果は出ていませんが、ちゃんとできたと思います。お休みを楽しくすごしました。

夏にはプレゼントをありがとう(小さなジグソーパズルを持っていきました)。いつネパールに来ますか？ 必ず私たちの家によってください。皆様にも「ナマステ」と伝えてください。」



SWATTI SADAN SCHOOL
の校庭で笑顔の
ミラちゃん



アルジュン君から新年の挨拶

ビシュヌさんのモーニング・スター・チルドレンズ・ホームの最年長者で、キャンパス卒業の後、仕事を見つけてアパートを借りて暮らし始めています。

夏に会ったとき、当時の給料が6,000円。秋にはもう少し上がりそうと聞いていたので、もう暫くで少し暮らしが楽になるね、と以前の手紙に書きましたが、生活はそう楽ではないようです。夏には家賃2,000円の一間に暮らしていましたが、隣室の男性がお酒を飲んで騒ぐので引っ越すことになり、家賃が4,000円になってしまいました。

一つ心配なのは1年前から頭痛に悩まされていて、CTスキャンを撮らないといけないと医者にいわれているようですが、高くてお願いできない状況と書いてあったことです。

「今の仕事の他にアルバイトをしないと生活していけないけれど、今の仕事には感謝しているし、幸せにしています。皆様にもよろしく、西暦2000年が幸いで順調でありますように」

やっと仕事もみつけ、ホームから自立したアルジュン君。でも、孤児であった彼には、家族、親戚という援護がない分、厳しい道のりのようです。

新刊案内 「行ってみようあのお店」フェアトレードの本全国版

楽しく、そして実感できるフェアトレードの思い。お店による違いを通して、様々なフェアトレードの形があることを身近で実感して下さい！

熱き思いをもってがんばっている「あのお店」。あなたと「思いの同じお店」を、このガイドブックがご案内します。

主な内容

【フェアトレードのお店】

北海道から九州までのフェアトレードのお店54店を詳しくご紹介。各店のスタッフの方々が、お店を始めた動機、フェアトレードに関わってきた思い、今後への期待など、熱く語ってくださっています。

【ユニークな取り組み】

フェアトレードを専門に扱うだけでなく、ギャラリー、宿泊施設、自然保護団体などが各々の特色を生かしてフェアトレードを応援しています。フェアトレードを通じた国際協力に、決まりきった形はありません。

【歴史と海外事情】

欧米で活発に展開されているフェアトレード。その歴史や特徴を分かりやすく解説。また、欧米でのフェアトレードのお店を写真やデータを交えてご紹介します。

【フェアトレード輸入団体】

日本国内で活動をしているフェアトレード輸入団体7団体をご紹介。

【どこから来るの？フェアトレード商品】

世界各国から日本に運ばれてくるフェアトレード商品。フェアトレード商品の種類と生産国が一目でわかります。

【コラム】

フェアトレードに関わる方々から寄せられたコラムで、フェアトレードを様々な側面から考えて見よう。フェアトレードショップ運営に関わる方々3名の座談会で、ここだけの本音もチラリ・・・。

【まだまだあります!! フェアトレード商品取扱店リスト】

全国各地でフェアトレード商品を取り扱うお店を一挙にご紹介。あなたの家の近くにもきっとお気に入りになるお店があるはず。この本片手に訪ねてみてください。



A5版 カラー 8ページ含め全146ページ

目次概要

1,200円 + 税

フェアトレードのお店

フェアトレードショップ座談会

ユニークな取り組み

コラム：フェアトレードで人がつながる！開発教育協議会

上條直美

フェアトレードの歴史と海外事情

コラム：地域での新しい挑戦 ぐりん・ひす 加藤哲夫

フェアトレード商品輸入団体

コラム：ジェットロのフェアトレード事業 日本貿易振興会

西川壮太郎

コラム：地雷原を緑の畑に フリーTVディレクター河内豊英

どこから来るの？フェアトレード商品

コラム：「フェア」の中身 朝日新聞社会部 大久保真紀

まだまだあります!! フェアトレード商品取扱店リスト

海外の動き

フェアトレード・マーク（ブランド）と自己評価

消費者や支援下さる人達から、フェアトレード商品がどれかわかりにくいという声を聞くことがあります。もし、フェアトレード・マークがその商品に付いていれば、それは容易にわかりますし、購買意欲をそそることに間違いありません。

世界47ヶ国、143団体(1999年12月現在)の生産者と輸入団体(Alternative Trade Organization)が加盟するIFAT(International Federation of Alternative Trade)では、昨年の5月にイタリアで開かれたミラノ国際会議で、そのことが話し合われました。

フェアトレード・ラベルは、既に、FLO(Fair Trade Labelling Organization)により29ヶ国、約300団体の商品に認可されていますが、その適用は食品、嗜好品、その中でもほとんどがコーヒーに限定されています。残念ながら、ハンディクラフト商品への適用には無理があります。少量多品種で製品寿命も比較的短いので、一品一品に申請の手間隙と費用をかけていては、出荷に間に合いませんし、小さな生

産者にとって、認可費用は大変な負担になります。これでは、一般市場での製品価値を失うだけでなく、支援の中心である小生産者を締めだしてしまう結果になりかねません。

そこで、IFATの取扱い品目の中心であるハンディクラフト商品をどのように表示したら良いか討議したのです。

そこで、オーガニックのような品質基準を設けるのではなく、フェアトレードの意思を持って活動している団体(Ethical Traders)を表すマークを表示しようということが多数意見を占め、今年からその取組みを始めました。各団体のサイズや地域性に合わせて、実効性のある、真に小生産者の支援にも繋がるようなものを、IFAT基準から各団体毎にブレイクダウンして基準を作成し、会計年度末から3ヶ月以内に自己評価してIFATへ報告することにしました。この経験を2年後のタンザニアの国際会議で話し合い、詳細を更に詰めて最終的な基準作りを目指すことになっています。



新製品紹介「ネパール・カレー」

本格派のお料理に！
チキンカレーとベジタブルカレー

2種類を用意しました。

エスニック料理にかかせないスパイス。色をつけるだけでなく、スパイスの持っている体の調整機能や、いやす作用のためにも料理に使われます。

新鮮な、伝統的な味を失わないで、同時に日本人にも親しめる味。一見矛盾するかのようなこの課題を見事にクリアーして、辛さと味の深みを見事に実現。ネバリ・バザールとWEANコーオペラティブ^{注4}の女性4人のメンバーで開発した傑作です。時にはWEANコーオペラティブのメンバー、シタラさんのご家族総出で、ネパールにはない日本の「味の深み」を私達と話合う場面もありました。これぞ、真の味の国際交流かもしれません。

こんな楽しい経験を、是非、あなたにも味わって欲しいと思います。

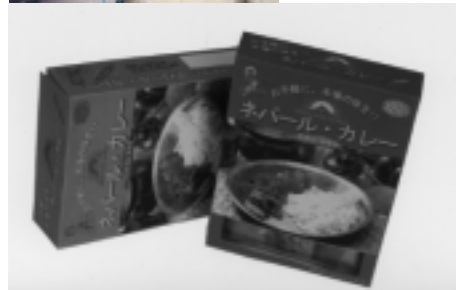
WEAN Cooperative (注4) のマサラ開発メンバー



WEAN Cooperative^{注4} のマサラ開発メンバー



WEAN Cooperative のお店



2種類のネパール・カレー・セット
チキンカレー / ベジタブルカレー
各 480 円 + 税 (4 皿分 x 2 セット)

料理講習会 高橋純子

12月の料理教室には、年の瀬にもかかわらず、21名の申込みがあり、スタッフがワクワク待受ける中、19名の方が参加され、いつもの地球市民がながわプラザを使用して開かれました。先生は、ネバリ・バザールの直営店ベルダのスタッフで在日10年のマンディラ・シュレスタさん。ネパールの伝統的な手作りおやつに挑戦しました。

【メニュー】

ヨーモリ：冬至の満月のお祭りで食べる蒸し菓子。今回はゴマあん。

サモサ：スパイシな野菜を餃子の皮で包んで揚げたお手軽に。

ハルワ：かぼちゃの生地をココナツで飾ります。

フルーツヨーグルト：ネパールのスパイスを効かせて。

無農薬紅茶：香りを楽しみました。

【サモサの作り方】(ネバリ・バザールのベジタブルカレーと市販の餃子の皮で作る簡単サモサです)

フライパンに油大さじ2を温め、みじん切りの玉ねぎ100gを炒め、塩小さじ2で味付け。ガラムマサラ以外のスパイスを加えます。

荒くみじん切りにしたニンジン50gを加えて炒め、火が通ったら、小口切りにしたニラ1/2把と、ガラムマサラを加えます。

蒸して皮をむきつぶしておいたジャガイモ250gを加えて火を止め、冷まします。

餃子の皮で三角に包んで、油で揚げます。

5～6人のグループに分かれ、まずはレシピを見ながら料理を始めました。チームワークが出来あがり左右するとあって、皆さん真剣でした。先生のマンディラさんは、各グループを回っては、時々デモンストレーション。「ヨーモリのゴマあんのたれ具合は・・・、かぼちゃの水気はよく取って」と、きめ細かいアドバイスが入りました。ユニークな形のヨーモリを蒸し器に入れヤレヤレ・・・、蓋を開けてビックリ。皮が破れ、ゴマあんが外に。「大丈夫、お腹に入れば同じよ」と、慰め合う姿もまた楽しかった。「ヨーモリは、病気の夫に食べさせようと、妻が心を込めて作ったのが始まりです。」マンディラさんのお話に耳を傾けながら試食の一時を過ごしました。美味しい！紅茶のお代わりも相次いで、別れが惜しい12月12日の夕暮れでした。

料理教室の様子
サリーを着てお手伝いする高橋さん(中央)



フェアトレードのお店

ベルダは楽しいイベントが満載です!!

ベルダでは、国際協力やフェアトレードについて共に考えていくために、また、協力の対象となっている国々の文化的すばらしさをご紹介するために、様々なイベントを行なっています。

「一般公開イベント(遠方の村活動紹介)」

公開講座(Mr. S. Shahi)2月18日-19日(金/土)

場所: あ~すぶらざ

「料理教室」7月

ネパール・カレー・マサラを使用して、美味しいカレー料理に挑戦しよう!

至大船

至横浜

本郷台駅

地球市民かながわ

プラザ2F

フェアトレードの

お店 ベルダ

TEL: 045-890-1447

FAX: 045-890-1448

あ~すぶらざ
(愛称)

「フェアトレード学習会」

「ベルダ」では、楽しい勉強会を連続で行ない気軽に参加出来るものを予定しています。

2月20日(日)75年の歴史があるマハグティの活動のお話を聞きます。

3月ワークショップ「コーヒーから考える世界の貿易」

4月「地域と共に」普段お世話になっている地域作業所との情報交換

5月「地域と共に」地域作業所の皆さんとバーベキューで交流

6月「新マサラカレー試作教室」

8月「新貿易ゲーム」

9月「講演会」10月「フェアトレードワークショップ」11月「芋煮会」

卸も全国的にしています!
お問合せ下さい。

国際理解にお役立て下さい。通信販売カタログ

ネパリ・バザーロでは、ニュースレターの発行、フェアトレード関連の本の出版、市民の方々の国際交流、支援の理解を深める活動も行っています。また、フェアトレードの活動に広くご協力頂けるように、通信販売カタログを作成していますので、ご興味がある方はご請求下さい。

学校、教育機関へのフェアトレード商品の貸し出し、講演会、お話しなど、開発教育のご協力も実施しています。お問合せ下さい。



ボランティア募集!

イベントのボランティアをはじめ、様々なボランティアを募集しています。お気軽にお問い合わせてください。

ネパリ・バザーロのホームページ・・・

グループの設立からフェアトレードに関する情報紹介など分かり易く読めます。

ご覧になってご意見をメールでどうぞ!

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo/>

<編集後記>



読者の皆さんに現地の紹介をすることで、フェアトレードの一端を知っていただければと願い、特集は2部構成です。「染色」には、ご自分でも染めや織りをする「ベルダ」スタッフの矢島万知子さんの協力を得ての編集となりました。

(昌治)



特集は、皆の協力でなんとかがんばれています。染め、織り、編み物と、好きな人の協力は楽しい。現地での活動は色々大変なことの多いですが、仲間の応援が心の支えです。(完二)



1年がかりで「行ってみようあのお店 フェアトレードの本全国版」がついに完成しました。編集を担当して一番良かったのは、たくさんの方々が思いを込めて書いてくださった原稿の最初の読者になれたことです。(早苗)



久しぶりにマフラーを編みました。小物でも、作っている間の時間と出来上がった時の達成感は楽しめました。(洋子)

発行所: fax: 045-890-1448
045-890-1447

247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町 274-15
第2中山ビル 3階

Tel: 045(891)9939 Fax: 045(893)8254

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo/>

E-mail: nbazaro@a2.rimnet.ne.jp

2000年02月 発行

発行責任者: 土屋完二

編集スタッフ: 太田昌治 魚谷早苗

土屋完二 春山洋子

編集協力者: 他スタッフ一同